



# 大衆文化研究プロジェクトニュースレター

No.01-2017



「百鬼ノ図」

伝土佐光吉 (1539-1613)  
国際日本文化研究センター所蔵

## ごあいさつ

小松 和彦  
日文研 所長

国際日本文化研究センター(日文研)は、2017年5月に創立30周年を迎えました。創立以来、総合的・学際的・国際的な視点から独創かつ先進性に富んだ共同研究を推進するとともに、世界各地の日本研究者をさまざまなかたちで支援してきました。

近年では、海外での日本文化への関心が、とくに大衆文化に向けられていることから、日本の大衆文化をより深くより体系的に捉えるためのプロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」を2016年度から6年計画で発足させました。そして、このプロジェクトを軸にして海外の日本文化研究機関とのネットワークの強化や国内の大学の「国際日本文化」関係の大学とも連携してコンソーシアムを形成し、人材・情報の交換を図り、グローバル化する日本文化研究へのさまざまな処方箋を考えていこうとしております。今後の進展にご期待いただくとともに、一層のご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

## 目次

ごあいさつ

活動報告

古代・中世班

呉座勇一

近世班

今井秀和

近代班

光平有希

現代班

アルバロ

研究紹介

古川綾子

データベース紹介

石上阿希

# 活動報告:古代・中世班

## 古代・中世班研究会②レポート

呉座 勇一  
日文研 助教

研究代表者:荒木 浩 日文研 教授  
開催日時:平成29年8月1日(火)・2日(水)  
開催場所:国際日本文化研究センター第1共同研究室



古代・中世班の第2回研究会は、合山林太郎(慶應義塾大学准教授)主宰の「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討(日本漢文プロジェクト)」(国文学研究資料館・公募型共同研究)との合同開催で8月1日・2日の2日間にわたって行われた。古代・中世班リーダーの荒木浩から参加者に向けて、大衆文化プロジェクト全体の構想および第1回研究会の成果報告、さらに今後の展開および具体的な開催予定に関する説明が行われた後、参加者の自己紹介が行われた。

初日の1本目の報告、合山林太郎の「様々なく和漢>:日本漢文学プロジェクトの成果と展望」は、国文学研究資料館の「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討(略称:日本漢文学プロジェクト)」の概要を紹介するものだった。プロジェクトの柱は2つあり、ひとつは日本漢詩文の“古典”や“名作”がどのような経緯を経てそのようにみなされていったか(名詩形成)を詞華集の網羅的蒐集を通じて総合的に分析すること、もうひとつは時代区分や研究史などの基礎的な概念などを、世界的な視野から再検討し、日本漢文学の新たな通史を構想することである。ただし、日本漢文学は、常に中国からの影響を受け、前代の日本からの連続性

が乏しいという事情もあり、通史を作る上で依然として課題が多いことも指摘された。漢詩文の大衆化・日本化の歴史を追うという視点は、大衆文化プロジェクトの今後の方向性を考える上でも有益であろう。

2本目の報告、劉雨珍(南開大学教授・日文研外国人研究員)の「筆談で見ると明治前期の中日文学交流」は、漢字文化圏独特の交流手段である筆談に注目したものである。この報告は、清国初代公使として明治10年から明治15年まで2本に駐在した何如璋、副使の張斯桂、参贊官の黄遵憲らと、元高崎藩主の大河内輝声、漢学者の宮島誠一郎、石川鴻斎、増田貢、重野安繹、青山延寿らとの間で交わされた筆談を中心に、明治前期、東京を舞台に展開された日中文化交流の実態に迫っており、非常に興味深いものであった。大河内輝声が通訳を拒否して、筆談にこだわったエピソードは、漢字が東アジア文化圏の共通語であったことを象徴しているように感じた。また、清の外交官が紅樓夢を、日本の漢学者が源氏物語を紹介するなど、日中の文化人が自国文化をどのように認識していたかが端的に示される点は筆談という史料の魅力であると考えられる。

初日の総合討議では、合山報告に対して、中国の漢詩文が日本でどのように受容されたかという視点だけ



でなく、日本の漢詩文が中国でどのように受容されたかという視点も必要ではないかとの指摘がなされた。また劉報告に関連して、韓国やベトナムの日常生活の中から漢字が消えつつある現在、東アジアにおける筆談による文化交流の時代を見直すことによどのような意義があるかという問題について議論があった。また両報告に対し、文学の議論に特化しすぎており中国思想の問題が抜け落ちているのではないかとの意見もあった。

2日目の1本目の報告、エドアルド・ジェルリーニ(カフォスカリ・ヴェネツィア大学、博報財団フェロー・日文研外来研究員)の「文学は無用か「不朽の盛事」か—平安朝前期に見る「文」の社会的役割とその世界文学における位相」は、ヨーロッパと東アジアの古典を比較するというアプローチによって、菅原道真の応制詩を再評価するものだった。伝統的な国文学研究では、宮廷詩人としての菅原道真の詩は、故事や中国古典を引用する過剰に装飾的な詩で、オリジナリティに乏しく「真の詩」ではないと軽視されてきた。しかし道真は嵯峨朝の文章経国思想を継承し、詩宴という公的儀式において「詩臣」として政治的役割を果たすという信念に基づき貞観・元慶期の詩人無用論に対抗した。こうした道真のあり方は、ロマン主義以前のヨーロッパの詩人に近似するという。現代の文学概念を基準に、全てのテキストを文学か非文学かを区別し、後者を貶めがちな文学研究の問題点も指摘された。

2本目の報告、葛継勇(鄭州大学、日文研外国人研究員)の「東国至人」から「郷賊」へ、「還俗僧」から「取経者」へ——留学僧円載の人間像と唐人送別詩」は、円仁・円珍と同時期に唐で仏教を学んだ円載の実像に迫るものである。円載は在唐留学四十年間の、帰国の途に着いたが、船が難破し、横死を遂げた。このため、無事に日本に戻った円仁・円珍が天台宗の双壁として尊崇されたのに対し、円珍と確執のあった円載は「破戒僧」などの悪評を得た。本報告は、円仁・円珍の日記・伝記・奥書・経典注疏などの諸史料や、唐人が円載に贈った

送別詩を詳細に分析することで、円載が名利を求めず国費留学僧としての使命を全うしようと刻苦勉励し唐人にも求法者として尊敬されていたことを明らかにしている。円載の在唐中の交友は、日唐文化交流史を進展させる上で貴重な事例と言えよう。

ディスカサントの滝川幸司(京都女子大学)は、ジェルリーニ報告に対し、詩と政治が不可分に結びついていたのは嵯峨朝に限ったことではなく、「嵯峨朝の文章経国思想」と特別視すべきではないと指摘した。また日本における日本漢文学研究では、抒情詩中心的な見方は克服されつつあると述べた。葛報告に対しては、円載に対する唐人送別詩を正確に解釈するためには、阿倍仲麻呂など他の留学日本人に対する唐人送別詩との比較を進め、唐人送別詩の類型性を解明する必要があると指摘した。

2日目の質疑・総合討議では、ジェルリーニ報告・葛報告がそれぞれ提示した漢詩の解釈に対して異論が提出されるなど、活発な議論が交わされた。

2日間にわたる研究会において、日本文化の基底と総体を考える上で欠かすことのできない〈漢文〉について、国際的・学際的な視点で議論を積み重ねることができたと考える。



# 活動報告:近世班

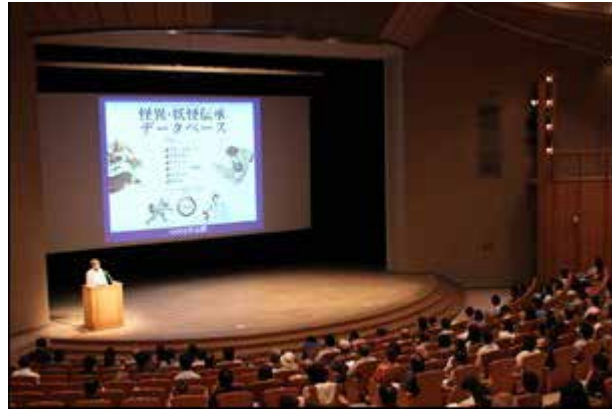
## 近世班研究会①レポート

今井 秀和  
日文研 機関研究員

研究代表者:小松 和彦 日文研 所長

開催日時:平成29年7月29日(土)

開催場所:国際日本文化研究センター日文研ホール、第3共同研究室



近世班の2017年度第1回研究会は、前半を日文研ホールにおける日文研シンポジウム「妖怪データベースからの創造—公開15周年記念シンポジウム」(主催:日文研、後援:近世班)として、後半を第3共同研究室における近世班「総合討論」として開催した。またシンポジウムに先立ち、希望者による日文研妖怪資料閲覧会を図書館にて行った。

シンポジウム冒頭の、小松和彦(日文研所長)による基調講演「妖怪データベースは役に立ったか?」では、近年の妖怪研究において日文研の妖怪DBが果たしてきた役割が示され、またDBに関する今後の課題についても問題が提起された。山田奨治(日文研教授)の報告「妖怪データベースの使われ方」では、研究利用のみならず商業利用においても妖怪DBが用いられていることが解説され、またAIによるDBの実験的利用法も披露された。

続くパネル討論「妖怪研究から文化創造へ」では、パネリストとして峰守ひろかず(小説家)、伊藤慎吾(日文研客員准教授)、松村薫子(大阪大学 准教授)、郡司聡((株)KADOKAWA執行役員)を迎え、それぞれ、実

作者としての創作へのDB利用(峰守)、妖怪辞典や妖怪小説の動向を踏まえた上でのDBの位置付けや影響関係の整理(伊藤)、日本各地の妖怪地域興しにおけるDB利用実態の報告(松村)、過去20年ほどの日本出版界における妖怪の取り扱いの変化やDBとの関わり(郡司)といった報告が為された後、安井眞奈美(日文研 教授)が司会を担当して、以上のように多岐に渡るジャンルのパネリストが相互に意見や質問を交わす積極的な討論が行われた。当日の全体進行は今井秀和(日文研機関研究員)が担当した。

シンポジウム終了後、会場を移しての近世班「総合討論」では、シンポジウムにおける各報告や、パネル討論において議論された様々な内容および、そこで提示された新たな視点を踏まえた上で、より専門的なディスカッションが展開され、今後の近世班の方針や、DB に求められていることと実現の可能性などについて、多角的な議論が為された。「総合討論」に参加した近世班のコメンテーターは以下の通りである。香川雅信、木場貴俊、近藤瑞木、徳永誓子、永原順子、福原敏男。



# 活動報告:近代班

## 近代班研究会②レポート

光平 有希  
日文研 プロジェクト研究員

研究代表者: 細川 周平 日文研 教授

開催日時: 平成29年7月22, 23日

開催場所: 国際日本文化研究センター第5共同研究室



近代班の第2回研究会では、3名の報告者による研究報告のほか、総合討論、および今後の展開や具体的な開催予定に関する話し合いが行われた。

まず、報告1の福田裕大氏(近畿大学国際学部・准教授)による「フランス、黎明期の録音技術:レオン・スコット・ド・マルタンヴィルの業績を再検討する」では、19世紀に「フォノグラフ(音の振動を視覚的に記録する機器)」を考案したフランス人技師、レオン・スコット・ド・マルタンヴィルに焦点が当てられた。同報告では、スコットの業績や知的背景、さらに「フォノグラフ」制作過程における人間関係や各知的階層との関連性、当時のフランスの科学制度など、非常に多角面からの検討による見地が示された。終盤では、それまでの考察の集約として、アメリカでエジソンが開発した音響装置「フォノグラフ」の前物として捉えられてきた、「フォノグラフ」やスコット自身の評価へのアンチテーゼが示され、聴覚文化論からの興味深い再評価が提示された。

報告2では、城一裕氏(九州大学芸術工学研究院・准教授)により「ポストデジタル以降の音を生み出す構造の構築」というタイトルで報告が行われた。音響技術においてデジタル、そしてポストデジタルといわれる各時代を経るなか、なおデジタル音響技術は着実に進歩を遂げている一方、徐々に音を生み出す構造自体に対する関心は低下しているという。このような背景のもと、城氏は現在、最終的な音の生成にデジタル音響技術を用いることなく、機械による「針の振動」・電磁気による

「歯車の回転」、生物の「筋肉の収縮」という3種の物理的な手段を用いて音を生み出す構造の構築を模索している。今回は、その過程報告が行われ、メディア・テクノロジーに批判的に向き合いつつ、技術の人間化の一例としての表現のあり方を探っている城氏の新たな研究に、今後の期待が高まった。

報告3の柿沼敏江氏(京都市立芸術大学・教授)による「オノ・ヨーコと音」では、時として芸術家やジョン・レノンの妻としての顔をクローズアップされる傾向にあるオノ・ヨーコ(小野洋子)の、音楽家としての側面に焦点を当てた報告が行われた。その中で柿沼氏は、オノ・ヨーコが重視した「音」に着目し、彼女による音源・著作、そしてオノ・ヨーコの来歴を具体的に示すことによって、オノ・ヨーコの「音」感覚や様々な領域(〈アート×日常〉〈芸術×音楽〉〈言葉×音楽〉など)を越えるアーティストとしての一面など、オノ・ヨーコと「音」を巡る興味深い示唆を提示した。

最後に行われた総合討論では、19世紀の音響記録装置から21世紀のデジタル化された音の利用と創作、さらには、音・音楽をめぐる研究倫理に至るまで、多岐にわたる内容が議論の題材にあがった。そこでは各分野の研究当事者たちによる白熱したディスカッションが行われ、共同研究メンバー間の今後の議論の深化、ひいては研究の発展に期待が高まった。

## 現代班共国際講演会レポート

アルバロ・エルナンデス  
日文研 プロジェクト研究員

発表者:大塚 英志 日文研 教授 「まんがは絵巻物が起源なのか」  
山本 忠宏 日文研客員准教授 + 山本ゼミの学部生  
「絵巻をまんがに変換する」

開催日時:平成29年1月28日

開催場所: Pavillon Jeunes Talents – Espace conférences  
アングレーム国際漫画祭、フランス



この発表はアングレームの国際漫画祭の一般向けの講演で、大塚氏と山本氏のゼミの活動成果を紹介した形で、歴史的な視点とまんがのクリエイターによる実践的な視点から日本まんがやアニメーションの「伝統起源説」を否定した。この「伝統起源説」というのは、例えば日本まんがは「信貴山縁起」や「鳥獣人物戯画」のような絵巻物、または江戸期の浮世絵という伝統文化から直接的に発展されたという、広く受容されている考え方を指している。発表の前半では、まんがの形式と絵巻物の形式が分析され、絵巻物とともに、フランスの有名な「民衆を導く自由の女神」の絵も、まんがに描き換える実験が紹介された。この実験によって、絵巻物がまんがとして描き換えられるのでまんがの起源になる、という高畑勲の仮説が否定された。それとともに絵巻物やフランスの絵をまんがとして描き換える実験に使われた「切断」と「構成」による「方法」が紹介された。この「方法」はエイゼンシュテインのモンタージュ論に基盤を持つ。このモンタージュ論はどのように日本の15年戦争下に受容され、さらに、どのように日本の伝統文化として解釈される

ようになったかについてこの発表で紹介された。後半には、山本氏とまんがの描き手である山本ゼミの学部生による発表では実際に絵巻物の表現方法を分析した上、いかにその方法を現代まんがに応用できるかについて紹介された。特にネットで盛んになっている縦スクロールまんがを参考にして、それと異なる形式の可能性を探り、「横スクロールまんが」の形式に絵巻物の分析が応用された。



### 「研究紹介・浪曲デジタルアーカイブと芸能資料のデジタル化について」

古川 綾子  
日文研 特任助教

日文研での私の主な研究(仕事)は、浪曲SPLレコードのデジタルアーカイブを作り、公開することだ。SPを再生するプレーヤーも無いところから始まったが、昨年6月にレーザーターンテーブル等の機器が揃い、資料課(旧情報課)のスタッフに支えられて作業を進めてきた。SPは両面合わせて7分しか録音されていないけれど、再生録音、デジタル化するには慣れたスタッフでも10分はかかる。1日30枚が限度だろうか。作業開始から1年2カ月経った現在(2017年8月末)、2,200枚のデジタル化が終わり、残りは7,800枚。全デジタル化にはまだ時間が必要だが、可能であれば今年度中に著作権手続きを終えたものから順次公開したい。

1万枚以上のSPLレコードを所蔵する施設は他にもあるが、浪曲だけで1万枚となれば話は違う。2013年9月から国立国会図書館が公開しているSPLレコード・デジタルアーカイブ「歴史的音源」では、約2万4,000枚の音源が館内及び提携図書館にて公開されているが(web公開は約1,000枚)、浪曲は17枚のみ視聴可能という現状である。日文研の浪曲SPLレコード・デジタルアーカイブでは、レコード音源とともに高画質で撮影したレコードレーベル画像や番付やプロ



マイドを基にした浪曲師の顔写真画像等も検索・閲覧できるようにすることで、音源アーカイブとしてだけでなく浪曲関係資料のデジタルアーカイブとしての可能性を探りたい。そのためには課題もある。日文研では芸能関係資料を積極的には収集してこなかったのか、映画や音楽はまだしも、歌舞伎や能狂言、文楽や演劇などの芸能関係資料は相対的に少なく、浪曲を含む落語や漫才などの大衆演芸になるとさらに限られるので、デジタルアーカイブに必要な資料収集にも取り組まなければならない。

芸能関係資料の収集を検討していた矢先、浪曲の資料ではないのだが、一昨年亡くなった個人コレクターの関係者から、歌舞伎・文楽の関係資料を日文研図書館に寄贈したいという依頼を受けた。昨年度中に話がまとまり、今年5月資料を運び込み、資料課のスタッフに手伝ってもらいながら約3カ月の整理調査を行い、重複分を除く3,577点の資料の図書館受入が実現した。国立劇場上演資料集や昭和20年代の歌舞伎・文楽関係雑誌など、他館には所蔵していない資料も含まれる。浪曲SPLレコード・デジタルアーカイブの仕事と調整しながらだが、貴重資料だけでもデジタル化して閲覧できるように準備を進めている。



## データベース紹介

### 「大衆文化プロジェクト関連データベース紹介:近世期絵入百科事典DB ー江戸時代の姿と名前を知るためにー」

石上 阿希  
日文研 特任助教

ある一枚の浮世絵がある(図1)。文を読む娘の傍らにふわふわとした白いものがかぶされた黒い円筒が置かれている。この白いもの、あるいは黒いものは何だろう。あるいは、この娘はどのような身分で何と呼ばれていたのだろうか。江戸時代の絵や事物について調べることが多い研究者にとって、慣れてしまえば何ということはないこのような疑問も、分野が異なる研究者が調べることは容易ではないだろう。ましてや、江戸時代の本を読んだ経験のほとんどない非研究者においては言わずもがなである。

しかし、江戸時代にはこのような疑問に答えるような書物が数多出版されていた。その嚆矢の一つが、京都の儒学者中村惕斎による『訓蒙図彙(きんもうずい)』(寛文6年[1666]序)である。本書は、「我が国最初の絵入百科事典」とされるもので、天文、地理、人物、動物、草花など20巻14冊にわたって全1484項目を収載している。一つの事物に対しその姿かたちの「図」と、呼称、異称、俗称の「彙」を併記する。

この形式は多くの追随書物をうんだ。本書を起点として、明治初期まで数多くの「訓蒙図彙もの」が出版されている。そもそも『訓蒙図彙』は惕斎自身の子どものために作られたものであったが、時代が下るにつれて仏像や建築、武具、歌舞伎などテーマはいよいよ細分化され、その種類は30に及ぶ。これらの書物によって、現実のもの、空想上のもの、森羅万象あらゆるものが、名前に形を添えて分類され、知識として伝播していった。

江戸時代、印刷技術の発達によって出版文化は大きく花開き、一つのテキスト、一つのイメージが地域や時代を超えて多くの人々に共有されていった。事物を分類し、その姿と名前を書物に刻んだ「訓蒙図彙もの」は、当時の人々の知識や情報に対する受容を研究する上で必読のものといえる。

筆者はこれらの書物を検索出来るイメージデータベースとして2017年7月に「近世期絵入百科事典DB(試作版)」を公開した(<http://dbserver.nichibun.ac.jp/EHJ/index.html>) (図2)。近年の日本古典籍のオープンデータ化を活用し、国立国会図書館や国文学研究資料館など日文研以外の資料を底本としている。現在は国会図書館蔵『訓蒙図彙』のみだが、今後は元禄版、寛政版の『訓蒙図



図1 鳥居清長画「座敷八景 塗桶暮雪」  
(『浮世絵聚花 ポストン美術館2』より転載)

[ちなみに黒い塗桶にかぶされているのは真綿で、この娘はそれを伸ばして綿を作る綿摘みである]



彙』や『人倫訓蒙図彙』、『百人女郎品定』などを追加していく予定である。

データベース化にあたって、テキスト全文を翻刻し、キーワードや「天文」などの分類から検索できるようになっている。また、トップページではデフォルトで全事項のサムネイルを表示しており、検索するキーワードが思い浮かばない場合も、目で検索することが可能である。

先述したように、『訓蒙図彙』は初学者である子どもに世界の姿と名前を教えるために作られた。つまり、本書は江戸時代の事物に対する「初学者」である現代の私たちにとっても非常に有用な書物であるといえる。本DBが研究者だけでなく、江戸を知りたいと考えるあらゆる人々の検索ツールとなれば幸いである。



図2 「近世期絵入百科事典データベース(試作版)」結果詳細画面

機関拠点型基幹研究プロジェクト  
大衆文化の通時的・国際的研究による  
新しい日本像の創出  
**大衆文化研究プロジェクトニュースレター**  
No.01-2017

タイトルデザインの図版の原典は左からの順で以下の通りです。

- 1)「福富長者物語」  
神谷詮敬(1775年写)日文研所蔵
- 2)「百鬼ノ図」  
伝土佐光吉(1539-1613)日文研所蔵
- 4) 墨池亭黒坊(1908年)「一心同躰切っても切れぬ中」他、「絵葉書世界」第14号より、日文研所蔵
- 5) 山路亮輔(2015年)「縦スクロールまんが」より

**大衆文化研究プロジェクトニュースレター**  
(No. 1: 2017年12月15日発行)

発行: 国際日本文化研究センター  
プロジェクト推進室

前川 志織 特任助教  
木場 貴俊 プロジェクト研究員  
アルバロ・エルナンデス プロジェクト研究員

〒610-1192京都市西京区御陵大枝山町3-2  
tel: 075-335-2079  
fax: 075-335-2090  
e-mail: taishu\_staff@nichibun.ac.jp  
http://taishu-bunka2.rspace.nichibun.ac.jp/